

創出される異文化イメージ

——白井鐵造のレビューに見られる「パリ」イメージを例に

袴田麻祐子

昭和初期の日本では、第一次大戦に敗戦したドイツに代わって、フランス文化のイメージが向上していた。ここでいう「フランス文化」とは、この時代台頭してきた「大衆」と呼ばれた都市中産階級の人々が興味を示した、レビュー、ミュージックホール、ジャズ、ダンスといったパリで流行していた娯楽のことである。実際にはこれらは「フランス文化」ではなく、大戦後パリを支配したアメリカニズムの象徴であったが、日本における「パリ」イメージはこうしたいわば混血児的な要素をもとに構築されていった。さらにパリからの情報を伝える送り手たちは、彼らが提示するものを効果的に見せるため、様々なフィルターをかけたり、まったく別の要素を創造して付け加えたりもした。そうして現れたのが昭和初期の日本に存在した「フランス」または「パリ」であり、そこから構築されたいわば現実のパリとは別の独自のイメージが、当時の日本人にとっての「パリ」だったのである。

本論では、そうした昭和初期の「パリ」イメージの代表的な一例として、宝塚少女歌劇の演出家白井鐵造(1900-1983)のレビューをとりあげる。白井は昭和3(1928)年から2年間パリへと洋行し、帰国後の昭和5(1930)年から再び洋行に出る昭和11(1936)年まで、次々と「パリ」をテーマにしたレビューをヒットさせ、後に「レビューの王様」と呼ばれるまでになった。その白井レビューとそれをめぐる言説から、白井本人やその作品を受け入れた人々が、宝塚独自の「理想のパリ」を完成させるまでの過程を検証する。現実のパリからの情報を取捨選択し、さらに自ら作り上げたイメージを加えながら「理想のパリ」を作っていく彼らの姿からは、一般に異文化受容という際に、文物の流入だけでは語れない、現実の姿とはずれて理解される部分がいかに多いのかが見えてくる。さらには近代の日本人が異文化である西洋との心的距離感を変化させていく様子も描きだされるのである。